様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１８４５４

研究課題名（和文）旧日本陸軍遺品資料における「大陸」諸宗教表象の研究

研究課題名（英文）Examination of materials regarding China Continent, left by modern Japanese people

研究代表者
高本　康子（Komoto, Yasuko）

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・地域比較共同研究員

研究者番号：９０４３１５４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：成果としては大きく二点に分けられる。第一点は、新たな資料の発掘・発見である。際立って多数の資料を所蔵する個人との連絡が実現し、それらを直接調査する機会に恵まれた。特に東京都内二か所の個人資料群は、現時点の確認分で総数二万点を超え、内容も様々な分野の資料を含む有益なものであった。第二点は、現状における資料をめぐる諸問題を具体的に把握したことである。現状において速やかな対処が必要な問題は2点あると考える。すなわち、資料だけでなく、体験や記憶を次世代にどのように引き継ぐかという問題、および、非デジタル資料が持つ脆弱性、すなわち公開性および所蔵施設の管理、運営にあたる人材等についての諸制約である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の第一の学術的意義は、従来研究対象とはされにくかった資料の、今後の活用可能性を拓く最初の作業であったということである。例えば個人の遺品を横断的に網羅することで、近代日本において、個人の体験が軍隊や地域で共有され、現代へ受け継がれていく軌跡を追う情報媒体とすることが可能になったと考える。このように、従来戦史的な分野に集中していた研究関心をより広く集めることで、新たな視点・視座の設定可能性も生まれた。また社会的には、戦後70年以上経過した現在において、戦争の記憶を直接持つ最後の世代に直接向き合う活動をすることで、その心情を個人レベルで汲み上げることができたのが最大の意義であったと考える。

研究成果の概要（英文）：The main object of this project is to examine and organize materials left behind by Japanese people who visited China Continent, including kept by Japanese Self-Defense Forces in their garrisons as memento of soldiers. In addition to comprehensive research and analysis on these materials, I got useful information concerning a lot of relevant materials privately owned by several families. Furthermore, we held an open research seminar on these materials, and it attracted widespread interest.

研究分野：日本近代史

キーワード：日本陸軍　写真　遺品　宗教　異文化　記憶　大陸　自衛隊

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、チベット仏教と日本仏教との交流史を主な専門とし、主に明治以降における日本人の「大陸」関連資料、特に写真資料の調査と収集につとめてきた。写真資料については近年、その撮影された時代を問わず、様々な分野の研究者・研究機関によって、掘り起こしとデータベース化の努力がされているが、まだまだ学術的な調査が及んでいない資料が多いものと推測される。その中で研究代表者が注目したのが、旧日本陸軍に関係した人々が遺した個人所蔵の写真資料である。戦後すでに 70 年余の時日を経てはいるが、すでに研究代表者が接触した複数の個人資料群の状況から、この種の写真資料が数多く存在する可能性が容易に推測された。しかし実際には、個人宅にいわば分散して所有されているため、学術的なアクセスに利便性を欠き、また万全な保存環境ではないために、特に昭和期以前の写真資料については、劣化や散逸が進んでいるという危惧があった。研究代表者は本研究開始以前に、陸上自衛隊旭川駐屯地北鎮記念館所蔵の写真資料を閲覧する機会を得て、本研究の予備調査となる作業を実施することができたが、その結果明らかになったことの一つは、これらの膨大な点数にのぼる写真資料の大半が、個人から北鎮記念館に寄贈された経緯を持つことであった。つまり北鎮記念館の資料は、個人資料が集積されたものであり、従ってこの資料を核として他の個人資料との横断的・網羅的な資料のネットワークを開いていく可能性を持つものであると判断するに至った。これにより、従来駐屯地資料が使用されてきた戦史以外の分野においても、広く大きな学術的活用が望めると考えた。

２．研究の目的

本研究は、北海道旭川市の陸上自衛隊旭川駐屯地北鎮記念館所蔵の資料を中心に、全国の陸上自衛隊駐屯地付設資料館・資料室に所蔵される旧日本陸軍関係者の遺品資料について、以下のような調査と分析を行おうと試みたものである。①資料の網羅的な所在調査と整理、および記録の作成。駐屯地所蔵資料だけではなく、関係者の個人宅所蔵遺品を合わせて調査し、他の旧陸軍関係資料群と連携した活用ネットワークの実現を目指す。これにより旧陸軍関係資料を、戦史等の分野に限定されない学術的・社会的活用が可能なものとする。更にそのような活用の具体的事例とするべく、②個人の手記等周辺資料も活用し、同資料に多数含まれる、チベット仏教等旧「満蒙」地域の諸宗教を被写体とした画像資料の分析を行う。これにより近代日本人が生活体験として持った異文化接触のありようを、「宗教」と「軍隊」から明らかにし、個人の体験が師団や地域で共有され、現代へ受け継がれる軌跡を追うことを目指した。

３．研究の方法

【陸上自衛隊各駐屯地資料館・資料室所蔵資料】特に旭川駐屯地北鎮記念館所蔵資料は、本研究開始当初において核心の研究対象と目するに足る重要性を持つ資料群であり、また資料総数が 6000 点を超えることから、この時点では本研究が調査を予定する中で最大の資料群でもあったと言える。これに加えて、旭川市周辺における関係者個人宅においても、資料の所在調査および聞き取り調査を行い、新たな資料の所在把握と保全、および北鎮記念館資料との関連把握を目指した。更に各地の陸上自衛隊駐屯地付設の資料館・資料室の所蔵資料を対象に所在調査および聞

き取り調査を実施した。これらの資料の地域性や位置づけを明瞭にし、その価値をより立体的に捉えるために、防衛研究所、靖国神社偕行文庫等、全国レベルの資料を所蔵する機関においても調査を実施した。

【個人所蔵の資料群への注目】上記調査を行う過程において、個人所有の資料群の存在が複数浮上してきた。いずれの資料群においても、所有者が非常に高齢であることが多く、調査自体を可能な限り速やかに実現しなければならない状況にあった。そのため、本計画当初予定していた駐屯地資料調査の一部分を、特に令和元年度から個人資料調査に差し替えた。遺品資料といういわば非常に個人的な資料特性から、一般の家庭で保管されていることが多いのは当然と言えるが、博物館・資料館や駐屯地の資料室など、公的な展示施設所蔵のアーカイブのような公開の性質を基本的に持たないこと、また規模や資料の持つ傾向が様々であることから、このような個人所有の資料は、その学術的利用が限定されてこざるを得なかった。しかしこのような資料群を横断的に把握できれば、戦時期の事実関係を追究するいわば戦史的な研究以外の、幅広い学術的な関心の対象として、例えば日本人の「大陸」に対する歴史認識を、戦時・戦後・現代へと連続的に、また専門家から青少年向けまで重層的に辿ることができる第一級資料群として、活用する可能性が十分考えられると判断した。そのため、資料点数が多く、時代的にも情報媒体としても幅広い資料を含むことから、今後の資料ネットワークの中心的存在となりうると考えられる東京都内の資料群二か所を特に選び、集中的に調査を行った。この二か所の資料については「成果」の項目において更に詳述する。

【今後の展開可能性への目配り】更に、本研究が挑戦的研究であることから、今後のより広い分野への展開可能性を視野に入れ、以下の関係各所での資料調査および聞き取り調査、記録の作成を行った。1.地域社会との連携という点への注目からは、例えば大村駐屯地鎮西精武館、善通寺駐屯地乃木館等、駐屯地資料の中でもより地域との関係が深い資料群に重点をおいて調査を実施した。また、東白川村平和祈念館をはじめとする、同種の資料が地域の民間有志によって維持・展示されている施設をも調査の対象に含めた。更に２．駐屯地資料との共通性及びヴァラエティの展開が見込めることから海上自衛隊佐世保史料館、呉史料館等、海上自衛隊所管の各種展示施設所蔵の旧海軍関係者の遺品資料を対象に調査を実施した。また３．として１．および２．のような遺品資料が戦後日本社会においてどのような影響力を持ち、どのような役割をはたしてきたのかという点から、報道映像等のメディア関連資料の調査を実施した。

【社会的な価値還元・貢献】以上の調査の成果について、公開研究会を開催し、学術的な価値の発信とともにそれらの社会的還元を目指した。旭川駐屯地資料について詳細な調査経験を持つ防衛大学校准教授関口高文氏を講師とし、「「北鎮」とロシア」と題して公開研究会を行った。当日の参加者は多く、特にアカデミズム外からの一般聴講が目立った。この開催により、親世代の第七師団体験をどう受け止め、引き継ぐかという問題に直面している世代に加え、そのような背景を持たない若い世代まで、少なくとも北海道という地域社会において広く関心がもたれていることを明らかにした。

【新型コロナウイルス感染拡大による影響】日本国内における新型コロナウイルスの感染拡大によって日本社会全般に生じた一連の諸規制・諸制約のために、本研究の研究活動は著しく制限されたと言わざるをえない。本研究が主な活動内容とするのは、現地における広範かつ徹底的な資料調査である。自衛隊駐屯地資料など、公的機関の所蔵によるもの、つまりアクセスが比較的容易であるものだけではなく、コロナウイルス流行という状況がない通常の場合においてもアクセスに慎重な配慮が必要なもの、つまり民間の個人所蔵資料等まで、広く多く調査対象に含めた点が、本研究の学術的特徴である。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大、特に本研究代表

者が居住する札幌市が、国内では最初の拡大が始まり、その状況が全国に報道され続けたことは、札幌市から国内各地に出向いて訪問することに、こちら側も訪問される現地もともに、感染に対する懸念を持たざるをえないこととなった。特に個人資料についてはその所有者が、通常においても持病など健康状態に細心の注意が必要な高齢者であったり、もしくはそのような高齢の家族が同居している場合が多く、感染のリスクを考えると、本研究でこれまで形成に努力してきた信頼関係を損なう可能性があることが懸念された。したがって行き来は厳重に控えるという以外の対策がとりようのない状況であった。2022 年度以降においても、感染に対する懸念が払拭しきれなかったため、現地調査の回数を極力減らし、リモートでの聞き取り調査など他の調査手段に振り替えて本研究の内容をデザインしなおした。

４．研究成果

【新たな資料の発掘・発見】際立って多数の資料を所蔵する個人との連絡が実現し、それらを直接調査する機会に恵まれた。資料点数が多数にのぼることから、さらに未知の資料群の存在をそこに見て取れる資料も多く含まれており、今後の学術研究展開の可能性を考えると、非常に有益な発見であった。特に東京都内二か所の個人資料群は、現時点の確認分で総数二万点を超えるものであり、その内容と規模は、上でも少し触れたが、本研究で取り扱った日本国内各地の自衛隊駐屯地資料および個人資料の中枢となるものだと考えられた。国内の駐屯地が所蔵する資料は、その大半が第二次世界大戦期に集中する傾向があり、それ以外の時期のものは点数としてそれほど厚みを持たない。本研究の重要な注目点である「異文化」についても、各駐屯地の前身であるそれぞれの旧陸軍各部隊が関わった特定の地域に集中している。それに対し、上述の都内二か所の資料群は、明治から現在までの資料が比較的均衡して含まれており、長いスパンで時間的連続性を見ることができる。またその内容も、旧陸軍関係だけではなく、外交、経済、教育、宗教、文化など多岐にわたり、海外に関する資料も、各地域を広く網羅する。従って駐屯地資料が持つ時代背景との関わりを、より具体的かつ精密に検討し、同定するための標準軌として活用することが可能だと思われる。またこのような資料を十分に活用することで、駐屯地資料が持ついわば偏向性とも言いうる特徴も、ヴァラエティの豊富さとして活かすことができると考えられる。

【現状における問題点の把握】現状において対処を考えていく必要がある問題として 2 点が明らかになった。第一は、資料だけでなく、体験や記憶を次世代がどのように引き継いでいくかという問題である。上にも述べたが、例えば公開研究会開催時の、アカデミズム外からよせられた関心の大きさには驚かざるを得ないものがあった。特に 80 代以上の人々からの反応には、切迫とも言える印象を受けた。この世代は、直接持つ戦時の記憶は幼少期の体験であり、限定的あるいは間接的な記憶であると言わざるをえない場合も多いが、しかし彼らの親世代は戦時、日本社会を現役で担った人々であり、従って親たちの体験を記憶として引き継ぐ者として状況に直面している世代であると言える。親世代の遺品資料を現在まで保管し続けてきたのは、このような人々であり、本研究において個人資料の調査過程で対面した方々の多くは、遺品そのもの、および親世代の戦争体験の記憶を、次世代へどう渡せばいいのか、その方法を模索して危機感とも言えるような焦りや不安を抱えている場合が多く見受けられた。もちろん物質的な資料のよりよい保全の方法を検討し実現することも重要であるが、彼らが今この時代に至っていだいているこのような心情はどのような意味を持つのか、それを考えることは、戦後日本人の精神史を考える上で、重要な要素となると考える。第二点は、デジタルの時代であるからこそ、非デジタル資料が見逃されていく可能性である。本研究が調査対象としたのはいうまでもなく後者であるが、このような資料については現在、その公開性および所蔵施設の管理、運営にあたる人材等に厳し

い制約があると言わざるをえない。一方、オンラインにおいて幅広い資料がデジタル形式で利用できるようになり、今後もこのような形式での便宜拡充が図られていくと思われる。しかし、デジタルデータの豊富さは、非デジタルの存在が見過ごされる危険性をはらんでいるのではないだろうか。このような危険性は今後、ますます増大するのではないかと、現状においては危惧せざるをえない。

【今後における展開可能性】本研究の対象は、陸上自衛隊駐屯地資料から以下のように展開した。まず、駐屯地所蔵資料から、個人宅に保管されている資料へ、また、全国の駐屯地資料の中からより地域社会とより関わりの深い資料群へ、更に陸上自衛隊だけではなく海上自衛隊所蔵の旧日本海軍資料へ、そして遺品資料そのものから、「遺品」が記録・収録されているメディア資料へ、である。これは、近代日本人が生活体験として持った異文化接触のありようを、「軍隊」から明らかにし、個人の体験が師団や地域で共有され、現代へ受け継がれる軌跡を追うことを目指した本研究の使命から、当然かつ有益な展開であったと考える。これにより、個人資料が今後もよりきめ細かく活用され得るレベルとして、市町村もしくはより小さい単位の地域社会の可能性が浮上した。また海上自衛隊所蔵資料の活用は資料の量的・質的な拡充が見込まれ、資料ネットワークの拡充に確実に寄与すると思われる。更に「遺品」が記録・収録されているメディア資料は、日本人が戦争に関する記憶のよりどころとして、何をどのように表象してきたのかを明らかにする有力な示唆を与えうるものだと言えるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Komoto Yasuko	４．巻 53
２．論文標題 Japanese Visitors to Tibet in the Early 20th Century and Their Impact on Tibetan Military Affairs	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Revue d'Etude Tibetaines	６．最初と最後の頁 341-364
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高本康子	４．巻 85
２．論文標題 大谷光瑞と「喇嘛教」―近代日本仏教と異文化―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本佛教学会年報	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高本康子	４．巻 24号
２．論文標題 「能海」召喚―近現代日本と「大陸」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 石峰	６．最初と最後の頁 36-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高本康子	４．巻 未定
２．論文標題 入蔵者往還―多田等観関連資料から見た河口慧海―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 アジア遊学	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高本康子	4．巻 3
2．論文標題 「「大同」と「理解」―中支宗教大同連盟資料に見る「大陸」と日本人」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本仏教団の宣撫工作と大陸	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高本康子、三宅伸一郎	4．巻 34
2．論文標題 寺本婉雅に関係する「宗林寺資料」「村岡家資料」に対する綜合評価	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大谷大学真宗綜合研究所研究紀要	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 高本康子
2．発表標題 大谷光瑞と「喇嘛教」―近代日本仏教と異文化―
3．学会等名 日本佛教学会2019年度学術大会（東洋大学、東京都文京区）
4．発表年 2019年

1．発表者名 KOMOTO　Yasuko
2．発表標題 Japanese Travellers to Tibet and Tibetan Military -Yasujiro Yajima
3．学会等名 Military Culture in Tibet, Wolfson College, Oxford（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 高本康子
２．発表標題 戦時下日本における「密教」イメージ
３．学会等名 平成三十年度密教研究会学術大会（高野山大学、和歌山県高野町）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高本康子
２．発表標題 冒険と明治日本
３．学会等名 龍谷大学宗教部学術講演会（龍谷大学、京都市）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高本康子
２．発表標題 戦時期日本と「喇嘛教」―満洲建国大学をめぐって―
３．学会等名 「日本とアジアの魂魄観についての比較思想史的研究」研究会（CHグループ会議室、京都市）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高本康子
２．発表標題 満洲国宗教施策と寺本婉雅
３．学会等名 真宗綜合研究所チベット班研究会（大谷大学、京都市）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高本康子
２．発表標題 日本近代の記録メディアとしての旧陸軍資料
３．学会等名 「旧日本陸軍遺品資料における「大陸」諸宗教表象の研究」公開研究会（北海道大学、札幌市）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 高本康子	４．発行年 2017年
２．出版社 自照社出版	５．総ページ数 123
３．書名 風のかなたのラサ	

１．著者名 田中和子、山極壽一、出口康夫、木津祐子、松田素二、白須淨眞、高本康子	４．発行年 2018年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 278
３．書名 探検家ヘディンと京都大学	

１．著者名 森雅秀、石濱裕美子、三宅伸一郎、服部等作、田中公明、立川武蔵、奥山直司、大羽恵美、高本康子	４．発行年 2018年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 576
３．書名 アジア仏教美術全集　中央アジアⅡ　チベット	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関